

## 尾瀬国立公園におけるニホンジカの生息状況と対策について

環境省関東地方環境事務所

片品自然保護官事務所 速水香奈

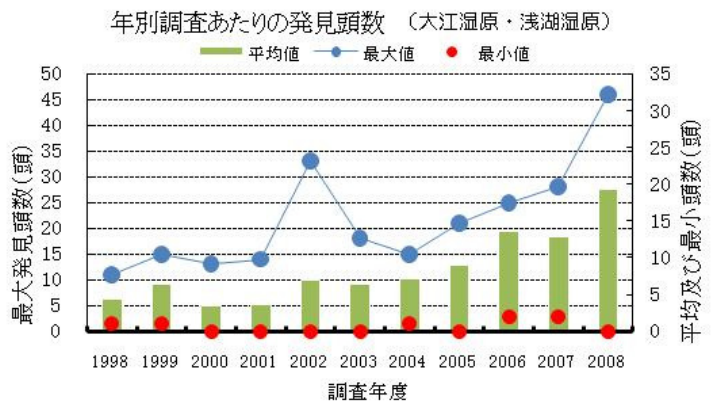
標高 1400～2000mに位置し冬は 3m 近い積雪を有する尾瀬国立公園では、ニホンジカ等の偶蹄類の影響を受けずに成り立った生態系を有している。しかし、1990 年代半ばにシカの生息が確認されて以来、生息数の増加や生息域の拡大に伴い、湿原植生を中心にシカによる攪乱が顕在化し、尾瀬の生態系に回復不可能な影響が及ぶ可能性が危惧されている。

環境省では、関係機関と「尾瀬国立公園シカ管理方針」を策定し、連携を図りつつ、国立公園内での捕獲の実施や、尾瀬へのシカの侵入を遮断する柵の設置、より効果的な対策を行うための各種の調査を行っている。

### 1. 尾瀬国立公園における生息状況

5 月～10 月中旬までの毎週末、尾瀬沼や尾瀬ヶ原においてボランティアによるライトセンサス調査(夜間木道から湿原の周囲・林縁部をライトで照らし、個体数をカウント)を実施し、尾瀬国立公園のニホンジカ生息数の指標の一つとしている。

年別調査あたりの発見頭数では近年増加傾向が見られ(右図)、2009 年度では尾瀬沼で 42 頭(6 月)、尾瀬ヶ原で 56 頭(8 月)の最大発見頭数を確認している。



### 2. 尾瀬国立公園における植生攪乱状況

食害やヌタ場の形成等の植生攪乱が林縁部から木道周辺にまで拡大しており、尾瀬国立公園全体で希少な湿原植生や景観の荒廃が見られる。

#### (1) 食害

ニッコウキスゲ、ミツガシワを始め、リュウキンカやコバキボウシ等、湿原に生育する多くの植物が食害にあっており、根茎の掘り返しや新芽・花芽の被食が見られる。



#### (2) ヌタ場やシカ道の形成

泥あび等によりヌタ場の形成や、湿原内を相当数往来することによるシカ道の形成等が確認されており、攪乱範囲の拡大が見られる。

写真(上): 牛首地区ミツガシワ根茎の食害

写真(下): 見晴地区木道脇に広がるヌタ場

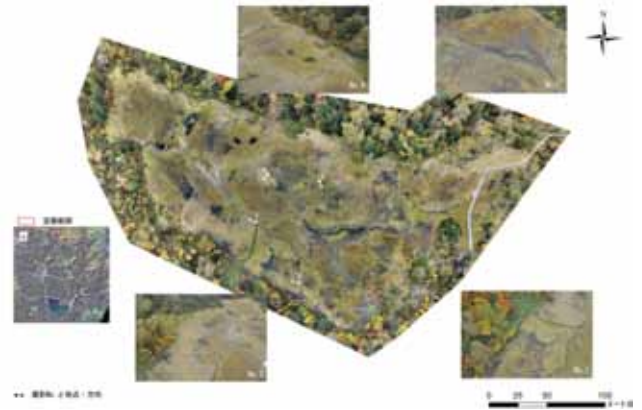


### 3. 尾瀬国立公園におけるシカ防除対策について

#### (1) 各種調査

##### ①植生攪乱状況の把握調査

ラジコンヘリを使った空中写真撮影、現地踏査による食痕調査等により尾瀬国立公園の植生被害の分布や主要区域におけるシカ道、ヌタ場、被食植物等の被害状況を把握している。また、定点撮影や解析された過去の航空写真との比較により被害面積・分布の広がり確認された。



写真：ラジコンヘリによる空中写真（2008年御池田代）

##### ②自動撮影カメラやGPS付首輪による移動経路の把握調査

季節移動ルートや越冬地を把握するため、自動撮影カメラによるシカ道の確認や捕獲したシカにGPS付き首輪の発信器を装着し、個体の移動状況を把握するテレメトリー調査（追跡調査）を実施している。これらの調査結果は捕獲や侵入遮断柵の設置等の対策へ活用を図っていく。

#### (2) シカ侵入遮断柵の設置

これまでの調査から把握できた季節移動経路上を遮断する形で、大清水周辺に柵（総延長約3km、高さ2.4m）を設置し、尾瀬への侵入防止対策や効果的な捕獲方法検討を行っている。

地図：シカ侵入遮断柵の設置位置  
（設置箇所：赤線 移動経路：黒点線）



#### (3) シカ捕獲の実施

尾瀬国立公園シカ管理方針の改訂に伴い、平成21年度より尾瀬国立公園の尾瀬沼等の核心地（特別保護地区）やシカ遮断柵周辺の季節移動経路上において銃や足くくり罠による有害鳥獣捕獲を実施している。（捕獲個体数については現在集計中）

### 4. 今後の課題・方向性

これらの対策を継続実施していく上で被害状況把握や対策評価を目的とした継続的な植生調査、シカの生態調査等が必要であり、今後はそれらのモニタリング体制の構築を進めていく。またテレメトリー調査の充実、シカ侵入遮断柵の延長、捕獲体制の構築による防除対策の強化を併せて実施していく予定である。